

プロジェクトコーナー

最初の水が届きました！

— 今井記念海外協力基金助成「簡易水道建設と研修による先住民族の生活改善事業」報告 —

水源地の貯水槽完成後は、貯水槽から村までのパイプを敷く溝掘りです。パイプはでこぼこした土地や農地の地下を通します。村人たちはいくつかのグループになり、地面を掘り、パイプを敷設し、村側の貯水槽を建設するなど、毎日順番に働きました。

対象の三つの村のうち最初に待望の水が届いたのは、水源とラナス村の中間地点にあるラハマ村でした。事業当初、人手が必要な資材運搬がコーン収穫時と重なるなど事業全体に 2 ヶ月近くの遅れが生じていたため、待ちに待った水でした。蛇口も洗い場もできていなのに母親たちは洗濯物を抱えて集まり、子どもたちは水浴びに興じました。

水道工事の遅れで、水を活用する衛生栄養教室の開催も 1 月にずれ込みました。バランガイヘルスワーカーのララさんのほか、スララ町の助産師も指導に当たりました。

工事は住民の協力で完了しました。さらに衛生状況の改善、水不足に起因する疾病を減らすなどの目標を達成するには、住民による水道施設のメンテナンスとともに、ララさんの月例訪問によるきめ細かな指導が欠かせません。私たちも機会を捉えて事業地域を訪問し、この成果と課題の把握に努めたいと思います。



溝を掘りパイプを敷設する



水がでたよ！

「歯磨き粉がなければチャン・グバットの葉でもいいかしら？」水道ができ、歯磨きをしようと指導するスララ町ヘルスセンターの看護師 Nely さんに質問する母親たち。



研修風景(撮影:相田 2/15)

— この事業は助成金のほか当会自己資金分として松尾氏寄附による松尾建設基金を使わせていただきました —

<Great Work プロジェクト> —モスン教育を中心として—

少数民族里親の会(FOT)から引き継いだモスン教育事業は今年 4 年目を迎えます。政府による画一的教育は、先住民族の子どもたちにハンディを背負わせ、民族の文化や親・長老を敬う心が育たない。先住民族がその文化を継承し、生態系を回復しながら経済的に自立できる教育が必要だとの観点で始められた事業です。

理念提唱者のマンズマン氏(元神父。住民は敬愛の念をこめて今も Fr. Rex と呼ぶ)が Great Work と名づけるように、200 種から 45 種に減少したといわれる稲の原生種保存なども含めた包括的プロジェクトです。すぐ結果がでるプロジェクトではなく、マンズマン氏の生き方、世界観を共有していないと、ともに働くのは難しい事業でもあります。



HANDS の理念と共通するところが多いため、5 年という期限を決めて支援を引き継ぎました。将来、外部からの支援がなくても継続できるようにと、2 年目からは自主財源の確保を事業の中心に置いています。家禽類の飼育、野菜栽培、山羊の飼育などです。

今年はマーベルに開設予定の駐在事務所を拠点として、これまで気がかりだった「地域の住民が事業をどう考え、本当に自主的に事業に参加しているのか」を確認しながら、支援していきたいと思ひます。

(写真:生まれた子ヤギの世話をするモスン学校の子ども)